護衛、鯱の主に誓約の首輪で繋がれ、警護中に声を殺して潮を噴き、剣を差し出す

R18

2026・10・21

目次

第1話

第2話

第1話

主の杯が、鞘の右手に置かれた。

「持っていろ。私は今夜、もう飲まない」

汐見が自分で注いだ酒は、縁のところで盛り上がっている。鞘は黙って受け取り、腕を体に寄せた。

護衛の右手は空けておくものだ。左は剣の柄に置き、右は相手の手首を払うために空ける。主の杯を持って後ろに立つのは、供の仕事だった。それでも客の前で、主の手を払うことはできない。

夜会の広間は、四隅の灯がひとつずつ落とされていくところだった。奥の卓にまだ客が何人か残り、汐見の前にも一人立っている。

眉の上に古い傷のある男で、茶の羽織を着ている。ときどき左の頬に手をやる。袖が広い。あの袖なら刃を隠せる。鞘は袖の口と足元を見た。右の靴は新しく、左の靴は外側だけが減っている。踏みこむなら左からだ。

鞘は汐見の半歩後ろに立っていた。立ち耳は外側が黒く、毛は短い。尾も短い。背は高く、胴は細い。客の目には、口数の少ない若い男の護衛に見えているだろう。胸当ては平たく、袴の前も平たい。袴の下に、男の物は付いていない。へその下だけが女のつくりで、まんこがある。汐見は雇ったときから知っている。客は知らない。

汐見は鞘よりずっと大きい。肩も背も厚く、真後ろに立つと、客からは鞘の胸から下がほとんど見えなくなる。口を開けると牙が

のぞく。羽織の裾から、白と黒の太い尾が床の近くまで下りていた。

「鯱の尾は、近くで見ると太いものですな。うちの若い者に見せてやりたい」

　客は頬に当てていた手を下ろした。

「見せるほどの物ではない。荷の話をしよう」

　汐見の声は小さい。前に立つ一人にしか届かない大きさで、客のほうが半歩寄って聞く。鞘はその半歩のぶん、客の袖の口を見た。

「北の倉の荷は、明日の朝に出していただけますか。実は、倉の裏に頭巾をかぶった者が来たという話がありまして」

「荷は出す。頭巾の話は誰から聞いた」

「うちの荷役です。夜に裏の戸を叩いて、北へ出る船はどれかと聞いたそうです。荷役は戸を開けなかった。顔も見ていない。それで斬られずに済んだ」

「その荷役は戸の使い方を知っている。明日、うちの船に一人ほしいくらいだ」

「差し上げたいところですが、あれがいないと倉が回りません。それで明日の朝のことですが、私は倉へ行けません。歯を抜きます。ずっと痛んでおりまして、今夜も酒がしみる。代わりに倉を任せている者をやります。右の小指が無い男ですが、目は確かです」

「目が確かなら、指は何本でもいい」

　客は笑いかけて、頬を押さえた。それから目を鞘へ移した。見たのは首だった。

「その方の首の革は、夜会の飾りですか。護衛の印にしてはずいぶん細い」

鞘の耳の付け根が熱くなった。首輪でも剣でも、飾りと言われるのがいちばん腹に来る。客の前で口は開けない。鞘は杯の縁から目を上げ、客の左の靴を見続けた。

「飾りではない。この者が自分で着けた」

汐見が振り向かずに言うのと同時に、羽織の裾から下りていた尾が、ゆっくり後ろへ振れた。

尾は鞘の脛に当たり、膝の内側をくぐって、腿の付け根へ入ってきた。太い。鯱の尾は硬く、表は湿った革のようになめらかだ。それが袴の股の布を下から持ち上げ、まんこの形に沿って押し当てられた。

鞘は息を止めた。杯の面が揺れ、酒が縁のほうへ寄る。

「自分で、ですか。それは、また」

客がうなずいた。汐見もうなずき、その拍子に尾の付け根が動いて、股に当たっている所が前から後ろへ一度こすれた。布越しにクリが潰れる。腰が跳ねかけて、鞘は右腕を脇に締めた。こぼせば、主の杯を客の前で粗相したことになる。鞘は腰を止めた。尾は布の上で、また前へ戻ってくる。

「ん〵……ん」

声は鼻の奥へ逃げた。客の目は、相づちのように揺れる尾を見ているだけだ。

「誓いのたぐいは港ではもう流行りませんな。昔の船乗りはよくやったものです

が。……ああ、思い出しました。誓約の首輪というやつでしょう。主の手の届く所から離れると締まるという」

「よく知っている。港でも、もう見る者は少ない」

「祖父の代の船頭が一人着けておりました。では、もし私がその方に下がれと申したら」

「下がらせたいなら、私が下がる」

　客は目を丸くして、それから声を出して笑い、頬が痛んだのかすぐ顔をしかめた。

　汐見がまたうなずいた。尾が股の下で左右に揺れた。袴の布が尾に巻きこまれて、まんこの筋に食いこみ、その上を尾の硬い背がなぞっていく。鞘は膝を締めた。腿に挟まった尾は、かえって強く当たった。

杯の酒は、まだこぼれていない。鞘は縁の盛り上がりだけを見て、膝の震えを靴の中に押しこんだ。

汐見の右手が、羽織の後ろへ回った。

左の扉を見ろ、の合図だ。汐見はいつも、手を背中に回して指の先で扉を差す。鞘は左の扉へ目をやった。扉の下からは廊下の風が入ってくるだけで、靴の影はない。

指の先は扉へ向かず、袴の前に来た。

尾がまんこの下から抜け、代わりに右手の指が、袴の前を上から撫で下ろした。平たい布の下に男の形が無いことを、指がなぞって確かめる。そのまま、まんこの上の端に指の腹が乗った。布一枚の向こうで、クリが押される。

「ん゛ん……っ」

　鞘は唇の裏を噛んだ。客からは、汐見が手を後ろで組んでいるように見える。指は、クリの上で小さく円を描きはじめた。尾でなぞられていたときより、熱が一か所に集まってくる。

「頭巾の者が北の船を聞いたというのが、どうも気になりまして。当主の船は北へ出るのが多い。荷が狙いなら倉を破ればいい。わざわざ船を聞くのは、乗る人のほうを見ているのではないかと」

「私の首なら、もう何年も狙われている」

「それで、そちらの方を」

「この者の前では、刃は私まで届かない」

指が止まらないまま、汐見は言い切った。円が少しずつ下へずれて、布ごとまんこの筋に沈んでいく。袴の内側で、下帯が冷たく肌に貼りついた。まん汁が下帯を越えて、袴の裏まで染みはじめている。

「当主。申し訳ないが、その方にほんの少しだけ離れていただけませんか。歯の話まで聞かれるのは、どうもきまりが悪い」

客が頬に手を当てて言った。さっき「下がれと申したら」と聞いたのは冗談ではなかったらしい。

下がれば首輪が締まる。それでも、客の頼みなら主は止めない。指からも逃げられる。鞘は杯を胸の前で支えたまま、踵を後ろへずらしかけた。

首の後ろの留め金が、かちりと鳴った気がした。革の内側が、喉仏の下にひやりと触れる。まだ締まってはいない。あと少し下がれば、ここが喉に食いこむ。

鞘は踵を止めた。

汐見は振り向かない。右手も、まだ鞘の股の前にある。

「この者を下げるなら、私も一緒に下がる。歯の話は私の耳にだけ入れてくれ」

「……いえ、それなら聞かれても構いません。抜くのは明日の朝いちばんです。泣くかもしれない」

「抜いたらうちの船の氷を分けてやる。頬に当てておけ」

客がまた笑った。その声に紛れて、指が袴の上からまんこの筋をまっすぐ上へなぞった。下の端からクリのある上の端まで、布を押しこみながら上がってくる。クリを指の腹で押し潰し、また下まで降りる。濡れた布が指に引かれて、肉にこすれる。

「ん、んゞ……っ、ぅ……」

鞘は顎を引いて、息を胸当ての内側へ落とした。杯は揺らさない。震えているのは膝と、尾の先だけだ。短い尾が腿に貼りついても、先が跳ねる。

「そろそろ私は失礼します。ほかの卓の方にもよろしくお伝えください」

客が言った。汐見は手を離した。

「回る。ついてこい」

鞘にだけ聞こえる声で言って、汐見は大きな歩幅で歩きだした。首輪がある以上、主の手の届く所から出られない。大股で追うと、歩くたびに濡れた袴の股が腿の付け根でこすれた。布がまんこに貼りつき、離れ、また貼りつく。クリが布の縫い目に擦られて、足を出すたびに腰の奥がひくついた。

汐見は奥の卓の前で立ち止まった。鞘は止まりきれず、汐見の背中に胸が当たりかけた。杯を引いて、どうにかこぼさずに済んだ。

「今夜はよく来てくれた。北の船が戻ったら、また呼ぶ」

「当主の船が戻ると、港の魚が安くなるそうで。うちの女房が喜びます」

卓の客たちが笑った。汐見は頭を下げ、下げたまま右手を背中に回した。卓の客からは、汐見の大きな体と、その肩の上に出た護衛の顔しか見えない。指は、歩いて濡れが広がった布の上で、クリを横から弾いた。

「ん゛っ……ん……」

鞘は杯を持ったまま、卓の客の手を見た。どの手も杯か菓子を持っている。刃はない。いちばん危ない手は、自分の股の上にあった。

汐見は頭を上げ、また歩きだした。今度は急に遅くなった。鞘はつんのめるように足を止め、半歩の間を詰め直した。止まるたび、歩くたびに、濡れた布が擦れる場所が変わる。汐見は向きを変え、別の卓へ寄り、また急に足を速めた。鞘はそのたびに主の背中を

追い、杯を胸の前で水平に保ち、膝を笑わせながら歩いた。

　卓を回り終えて左の扉の前に戻ると、茶の羽織の客が帰り支度をしていた。

「では、明日は倉の者をやります。小指の無い男です。お手柔らかに」

「目が確かなら、こちらも手荒にはしない。歯はよく冷やしておけ」

　客は頬を押さえたまま一礼して、扉の外へ出た。廊下を行く靴の音は、左のほうが重い。角を曲がって遠ざかる。刃の気配はない。

　扉が閉まった。

　汐見が振り向いた。鞘の顔を見て、それから杯を見た。

「こぼさなかったな。その酒が今いちばん欲しい」

「もう飲まないと言ったのは、主です」

「揺れたぶん、旨くなっている」

　汐見は杯を受け取り、一息で飲み干した。

「帰る。表の通りは使わない」

　＊

　馬車は狭い。

　前向きの座席に汐見が座ると、それだけで半分が埋まる。鞘は汐見の左に座った。扉の側だ。剣を吊った左の腰が扉の側にあれば、外から開けられたときにすぐ抜ける。尾は座席の下から床へ伸びて、鞘の足首の横にある。

前の壁には、御者台へ通じる小窓があった。木の戸板が一枚、横に滑るだけの物だ。

馬車が動きだしてすぐ、汐見は羽織の内から白い手袋を出した。夜会の入り口で外して、しまっていた物だ。右の片方を鞘の膝に置いた。

「袴の内へ入れろ。脚のあいだに挟め」

「……挟んで、どうするのですか」

「落とすな。屋敷に着くまでだ」

鞘は袴の脇の開きから手を入れ、手袋を下帯の前へ差しこんだ。濡れた下帯の上に、乾いた布が当たる。腿を閉じると、手袋の指の縫い目が、ちょうどまんこの筋に沿って挟まった。

汐見が小窓の戸板を開けた。

「裏の道を行け」

「へい。裏ですと石が粗いので揺れますが」

「揺れるほうがいい」

御者の声が、戸板の隙間からすぐ前で聞こえる。鞘は口を閉じた。汐見の左手が、袴の上から鞘の股に置かれたからだ。布の上から押されると、内側の手袋がまんこに押しつけられ、縫い目がクリに当たった。

馬車が石を踏んで、大きく揺れた。

「ん゛ん……っ、く」

鞘は喉を締めて、音を鼻へ逃がした。揺れのたびに、汐見の掌の重さが手袋を押し、縫い目がクリをこすり上げる。汐見の掌はじっと置かれたままで、責めてくるのは道の石だった。

汐見が小窓を閉め、鞘の顔を見た。

閉めれば御者に声は届かない、と言いたげな顔だった。

鞘は首を振った。目は後ろの小さな窓に向いていた。屋敷を出てから、後ろで別の車輪の音がしている。荷車だ。軽い。ずっと同じ間を空けてついてくる。

「後ろに荷車がいます。夜会の屋敷の角から、ずっと」

汐見は後ろの窓を見た。少し黙って、それから、鞘の股に置いた手にゆっくり力をこめた。

「見ていろ。刃なら私より先にお前が分かる。それまでは、この膝は私がもらう」

「主、今は」

「腰を引くと、外が見えなくなるぞ」

　指が袴の上から、手袋ごとまんこの筋を割るように沈んだ。

「ぁ〝……っ、あ、あ……っ」

　小窓は閉まっている。声は、喉から先へ出てしまった。鞘は口を手で押さえかけて、やめた。右手は空けておくものだ。後ろの荷車が刃なら、右手で抜かなければならない。

　指が手袋の上でクリを探し、縫い目ごと押し潰した。押し潰したまま揺らす。馬車の揺れと、指の揺れが重なる。

「あっ、あ〝……っ、ま、って、縫い目、が……ずれ、て……っ」

　腰が逃げようとすると、座席の背が尻を押し返す。汐見の掌は大きく、指を立てなくて

も、手袋ごと股の全部を覆ってしまう。その掌の中で、クリだけが縫い目に捕まって、揺れのたびに右へ左へ倒される。下帯の内でまんこがひくつき、まん汁が手袋の指の付け根を濡らしていった。鞘は踵を床に突っ張って、腰の高さを変えないようにした。腰が沈めば、外を見る目の高さもずれる。

「は、ぁ〝……っ、あ、ぁ……」

　汐見は指先だけを立て、手袋の上からクリの根元をくすぐるように掻いた。腰が跳ねて、鞘は後ろの窓の枠に額を打ちかけた。

　荷車の灯が、角を曲がって見えなくなった。違う道へ入ったのだ。刃ではなかった。鞘の膝から、それで力が抜けた。

「消えました。後ろは、空です」

「酒屋の車だ。あの角の先に、夜も開けている店がある」

「……知っているなら先に言ってください」

「お前が外を見ている顔を、もう少し見ていたかった」

　汐見は顔を寄せた。鞘の口元へ、自分の耳を寄せた。

「私は声を大きくしない。お前も大きくしなくていい。ここへ出せ」

　耳が、すぐそこにあった。鞘の息が、汐見の耳の縁に当たる。

「……広間で、膝が揺れていたのは」

　鞘は言いだしたら、止まらなかった。

「あれは、揺れていたのではありません。あの客は左に体重を残していました。踏みこむ

なら左からで、袖に手を入れるなら右です。だから私は左の膝を抜いて、いつでも前へ出られるようにしていました。膝を抜けば揺れます。そう見えたのはそのためで、主の手のせいではない。杯をこぼさなかったのも、腕が落ち着いていたからです。腕が落ち着いているなら、膝も、ちゃんと、言うことを聞いて――」

汐見の指が、手袋の上からクリを摘まんだ。

「ひ、ぁ゛……っ、ぃ……っ」

「左を抜いていたなら右は誰のせいだ」

「み、右は……っ、右、は……」

「誰の、せい、でも……っ、ぁ、あ゛……」

続きが出てこなかった。指が手袋ごとクリを摘まんで、ゆっくり転がしはじめたからだ。濡れた下帯と乾いた手袋が、指に挟まれてクリの上でよじれる。まん汁が手袋にまで染みて、乾いていた布がぬるりと滑りだした。

「ぅ、あ゛、あっ……あ、主、あるじ……っ」

汐見は摘まんだクリを、手袋ごと上へ引いた。皮が引かれて、芯が縫い目の内側にむき出しにこすれる。放されて、また摘まれる。引かれるたびに腰がついていき、座席から尻が浮く。その下へ指の付け根がもぐりこんで、まんこの口を手袋の上から押し上げてくる。クリを摘まれ、下では口を押されて、股のどこにも逃げ場がない。

「や、ぁ〝……っ、した、まで……っ、手袋、はいっ、ちゃ……っ」

手袋の指先が、濡れた下帯ごと、まんこの口に浅く沈んだ。中までは届かず、口の縁だけが布にこじられて、ひくひくと吸いつく。

汐見は耳を鞘の口に寄せたまま、聞いている。指だけが動く。転がして、押して、また転がす。袴の前が湿って、指に布が吸いついた。

腹の奥が、きゅうっと縮んだ。膝が開きかける。鞘は剣の柄を左手で握りしめ、その拍子に腰が浮いた。

「主、あるじ、もう……っ、だめ、です、これ以上は、膝が……っ」

汐見の右手が、前の小窓の戸板にかかった。

鞘の息が止まる。

汐見は戸板を開けた。

「蹄の音が乱れているな」

「へい。右の前の蹄鉄が夕方から少し緩んでおりまして。明日の朝いちばんに鍛冶屋へ連れていきます。今夜はもう少しだけ辛抱してもらいます」

御者の声が、すぐ前にある。その間も、汐見の左手は止まらない。手袋の縫い目がクリの上を往復する。イく手前まで来ていた体が、戸板の向こうの声に押し戻されて、腹の奥でつかえた。

「ん゛……ん゛ん……っ」

鞘は奥歯を噛み、声を鼻の奥で潰した。目の端が濡れる。柄を握る左手の骨が白く浮いた。

「鍛冶屋の払いはうちに回せ。急がせるな。屋敷までそのままでいい」

「へい、ありがとう存じます」

汐見は戸板を閉めた。

その音と同時に、指が手袋ごとクリを押し潰し、強く速くこすり上げた。

「あ゛っ、あ、ぁあ゛っ、だめ、あるじ、もう、イ、く、イく……っ、イ゛……っ」

声は全部、汐見の耳の中へ出た。腰が座席から浮き、腿が汐見の手を挟んで痙攣した。まんこが手袋に吸いつくように縮んではまた

縮み、指は縫い目をクリに押し当てたまま離さない。

「お〝……ぉ、あ〝……っ、まだ、こすっ……な、いで……っ、イって、る、イってます、から……っ」

汐見は指を止めず、ゆっくりにした。イっている最中のクリを、手袋越しにやわらかく撫でつづける。そのたびに鞘の腰が跳ね、まん汁が下帯の脇からあふれて、手袋の指の中にまで溜まっていく。

「ぁ……ぁ〝……は、ぅ……」

声が細くなって、ようやく汐見の指が止まった。袴の上に掌を置いたまま、汐見は鞘の口元から耳を離した。

「港じゅうの店を回っても、この声は買えない」

鞘は座席の背にもたれて、息を整えようとしたが、うまくいかない。まんこに貼りついた手袋が、ぐっしょりと重くなっている。袴の前は、触らなくても冷たさで分かるほど濡れていた。剣の柄から手を離せない。いま離せば、手が震えているのが自分でも分かってしまう。

馬車が止まった。

汐見の屋敷の裏口だった。御者台から人が降りる音がして、外から扉が開いた。

「当主、お着きでございます」

汐見が先に降りた。鞘は膝に力を入れて立ち上がった。そのとき、袴の脇の開きから、

何かが滑り落ちた。

　白い手袋が、座席の上に落ちていた。

　鞘が手を伸ばすより先に、御者が身をかがめて、それを拾った。掌に載せて、少し首をかしげる。

「当主、お忘れ物で。……夜露にでも当たりましたかね。じっとりしております」

「そうだな」

　汐見は手袋を受け取らなかった。顎で鞘を差した。

「それはこの者に渡せ。この者の物だ」

「へい」

　御者は手袋を、鞘の掌にそっと載せた。濡れた布が指に貼りつく。御者はそれ以上何も言わず、馬の首を撫でに前へ回った。

「明日の朝、鍛冶屋へ行く前にうちの台所で飯を食っていけ」

汐見が御者の背中に言った。

鞘は馬車の段を降りた。足が地に着いたとき、膝がかくりと折れかけて、扉の枠を掴んだ。

汐見はもう、裏口の戸の前にいる。手を伸ばしても届かない所へ、出ていこうとしている。首の後ろで、留め金が革を引いた。

鞘は枠から手を離して、主の背中を追った。濡れた袴が腿の内側に貼りつく。主を屋敷まで連れ帰れば、今夜の警護は戸の内側で夜明けまで立つだけになる。いつもなら、裏口の戸の金具と、塀の上と、庭の暗がりを先に見る。今夜、鞘は右の拳を握ったまま歩い

た。拳の中で、自分のまん汁を吸った主の手袋が、まだ温かかった。

第2話

「主人は、今朝いちばんに歯を抜きに参りました。代わりに私が伺っております」

　倉の座敷で、男が畳に手をついた。右の小指が根元から無い。男が顔を上げると、その背中の障子に土間の明かりが透けて、塩を詰めた樽の影が並んでいた。

「聞いている。目が確かな男だそうだな」

「主人がそう申しましたか。歯が痛いと人を褒めるんです、あの人は。治ったらまた私の悪口に戻ります」

「なら今日のうちに褒められておけ。悪口に戻ったらうちの船に移ってこい。船頭が一人、来年の春で降りる」

「冗談でもうれしゅうございます。ですが私は船に弱くて」

汐見は卓の向こうに座っている。杯を持つ左の手にだけ、白い手袋をはめていた。右の手は素手のままだ。片方だけの手袋は、座敷の中でいやに目についた。尾は羽織の裾から畳の上に伸びて、座敷の半分を横切っている。

座敷で空いているのは汐見の斜め後ろだけで、鞘はそこに立っていた。左の手を剣の柄に置いて、倉の者の手を見る。指は太く、爪の間に塩が白く残っていた。朝から樽を叩いてきた手だ。

「塩は乾いた樽だけを積みます。湿った物はこちらの土間に置いておきます。それから主人から預かってきた物が」

倉の者が懐から小さな箱を出し、卓の端に置いた。角の丸い、桐の箱だ。麻の紐で十字に結んである。

「倉の印です。船に積む前に、当主の前で開けるようにと」

「開けるのは積み終わってからでいい。印を先に開けると、船頭が箱ばかり見て樽を数え違える」

汐見が言ったとき、障子の外を誰かが小走りに横切った。影が一つ、紙の上を流れていく。鞘の耳が跳ねて、柄に体重が乗った。影は倉の奥へ消え、木の札を棚に掛ける音がした。荷役だ。

「では、私が障子の前に」

鞘が言うと、汐見は自分の膝を軽く叩いた。

「障子の前に立つ護衛は外から見れば的だ。私は的を雇った覚えはない。盾なら、ここへ来い」

鞘は汐見の膝を見た。倉の者も、その膝を見た。

盾だと言われれば、鞘には断る理由がない。障子の外に刃が来るなら、汐見の胸の前に自分の背中がある形がいちばん早い。鞘は剣帯の位置を直して、汐見の膝の上に腰を下ろした。

膝は硬く、高い。鞘の背が汐見の胸に当たり、汐見の顎が鞘の耳の後ろに来た。剣は左の腰に吊ったまま、柄の頭が卓の縁の上に出

ている。倉の者からは、剣を握った護衛が主の前に座っている姿に見えるはずだ。

「護衛の方を、膝に」

「港の船宿では、これがいちばん外から見えない座り方だ。うちの船頭は皆こうやって酒を飲む」

「船頭衆は、女を乗せて飲むと聞きましたが」

「乗せる者は、それぞれだ」

　倉の者はそれ以上聞かず、小指の無い手で帳場から持ってきた紙をめくった。

　汐見の左手が卓の端に伸び、桐の箱の紐を解いた。

「主。開けるのは積み終わってからでは」

「箱は開けない。紐だけ借りる」

解いた麻の紐を、汐見は鞘の左手首に回した。柄を握っている手だ。ひと巻きして柄の握りごと結び、結び目を鞘の袖の内に押しこんで、外から見えなくした。鞘は柄を握り直そうとして、指が開かないことに気づいた。

「抜くときは私が解く」

耳元で言われた。膝の上で剣を飛ばさないよう、固めてくれたのだと鞘は読んだ。座ったまま抜けば、柄が卓に当たる。

「乾いた樽は、荷役が札に書いて――」

倉の者が紙を指で押さえた。

汐見の右手が、鞘の袴の帯に乗った。

帯の結び目の脇、前の合わせから指が入った。剣帯はそのまま、袴の帯だけが指の分ゆ

るむ。指は下帯の上まで降りて、下帯の縁をくぐった。

　じかに、肌に当たった。

　鞘の背が伸びる。指の腹がまんこの上の端を探して、クリを見つけた。間に布は一枚もない。熱い指先が、皮をかぶったクリの上にそっと置かれた。

「っ……」

　鞘は息だけを吐いた。倉の者は紙を見ている。

「あの男の手を見ていろ」

　汐見が、唇をほとんど動かさずに言った。

「お前があの手を見ている間は私の手は見なくていい」

鞘は倉の者の手を見た。小指の無い右手が、紙の端をめくる。

めくるのと同時に、指がクリの上を一度撫でた。倉の者の手が紙を押さえて止まると、指も止まる。手が筆を取ると、指がまた撫でる。倉の者が何か書き足すあいだ、指はクリの皮の上を、筆と同じ速さで往復した。

「ん、っ……ぅ……」

鞘は奥歯を噛んだ。手から目を逸らせば、指がいつ来るか分からなくなる。見ていれば分かるが、止められはしない。

倉の者が筆を置くと、指も止まった。その下で、クリが脈を打っている。

「頭巾のこと、主人に聞き直しました。荷役はやはり戸を開けておらんそうです。叩く音

と、北の船はどれかという声だけで。それも若いのか年寄りなのか分からんと」

　倉の者の手が、卓の上の湯呑みに伸びた。指が動いた。今度はクリの皮を指の腹で押し上げて、むき出しの芯をじかに転がした。

「ぃ〝……っ、く」

　腰が前へ逃げ、腹が卓の縁に当たる。汐見の左の腕が鞘の腹に回り、膝の真ん中へ引き戻した。

「動くな。盾がずれる」

　左手は柄に結ばれ、腹は汐見の腕に押さえられ、股には右手の指がある。汐見の両手は鞘の体の上にあって、倉の者からは、主が護衛を抱えこんで守っているようにしか見えない。

湯呑みが口へ運ばれるあいだ、指はクリを転がし続けた。転がされるたびに膝の裏が汐見の腿の上で滑り、袴の内で腿がひくひくと震える。下帯の中でまん汁があふれて、指の付け根まで濡らしていく。

「分からないならそれでいい。尾ひれを付けると、港じゅうが頭巾だらけになる」

「荷役には、口を閉じておくよう言ってあります」

「閉じさせておけ。あの荷役にはうちから酒を一本届けさせる」

倉の者は湯呑みを置いて、障子のほうを振り返った。

「失礼。積み込みの板を荷役が逆さに敷いているようで。少し見てまいります」

倉の者は立ち上がり、障子を開けて土間へ降りた。障子が閉まり、土間で荷役を叱る声がする。

座敷には、二人だけになった。

「……わざと外へ出しましたね」

鞘は声を絞った。

「板を逆さに敷いたのは、荷役だ」

「主はいつもそうです。あの手袋もそうです。私の手に渡してどうしろと言うんですか。夜明けに井戸で洗っていたら下女に見られました。主の手袋を、護衛が井戸でひとりでこそこそ洗っているんですよ。下女は何も聞きませんでした。聞かない顔のほうが、よほどこたえます。それに片方だけはめて座敷に来るのもやめてください。倉の者が見てい

ます。片方はどうしたのかと聞かれたら？私は何と答えればいいんですか。それにこの紐です。盾だと言うなら、柄から手を離せなくしてどうするんですか。障子が破られたらどうします。私は主の膝の上で、剣を抜けもしないで座っているんですよ。だいたい――」

　指が、クリの芯をゆっくり押し潰した。

「ひっ、ぃ……ぁ゛……っ」

「下女には、私が汚したと言っておいた」

　汐見は、鞘の耳の付け根に言った。それだけで、ほかのことには何も答えなかった。

　指が潰したクリから離れて、まんこの筋を下まで撫で下ろした。口の手前で止まり、まん汁をすくって、またクリへ戻る。濡れた指の腹が、クリの上でぬるりと円を描いた。

「ぁ、あ……っ、は、ぁ……っ」

障子一枚の向こうで、倉の者が荷役に板の向きを教えている。鞘は顎を引いて、声を自分の胸当てに押し当てた。

「お前は、腹が立つとよく喋る」

指は止まらない。円が大きくなり、クリの根元から、まんこの口の上の縁までを一度に撫でていく。そのたびに、口がひくりと閉じて、指を追いかけるように開く。鞘は膝を閉じようとして、閉じれば主の手首を腿で挟むだけだと分かってやめた。

鞘の右手が動いた。

空けておいた右手で、帯の中へ入っている手首を袴の上から掴んだ。

指が止まった。

「……倉の者が戻ってきます」

「まだ板の上で叱っている」

「声が止みました。板はもう敷き直しています」

汐見は手首を引かなかった。掴まれたまま、指をクリの上に置いて待っている。鞘はその手首を握り、重さを自分の股に押しつけるように力をこめた。それから、障子の向こうの足音に耳を向けた。

障子が開いた。

倉の者が戻ってきて、卓の向こうに座り直した。鞘はぴたりと口を閉じた。右手は袴の上で、主の手首を掴んだままだ。

「失礼しました。板の裏表も分からん荷役で。……乾いた樽は札のとおりでした。湿っ

た分は塩を砕いて別の樽へ移します」

「砕いた塩はうちの船の厨にもらう。船乗りの汁には湿った塩くらいがちょうどいい」

「では、そのように」

　汐見は左手を卓へ伸ばし、自分の杯を取った。まだ口をつけていない酒が、半分ほど入っている。それを一息に飲み干し、空になった杯の底に残った滴へ、手袋をはめた左の指先をつけた。

　鞘は、汐見が何をしようとしているのか分からなかった。

　左の手袋が卓の下へ降りた。帯の内側へ、下帯の中へ。右の指がクリの皮を押し上げ、むき出しになった芯へ、酒を含んだ手袋の指先が触れた。

冷たさは、ほんの一瞬だった。酒の触れた所から、じわりと熱が広がる。濡れた布の目が芯にざらりと擦れて、熱さがしみこむように焼いてくる。

「ぁ……っ、あ、つ……ぃ゛……っ」

「酒がしみるのは、歯だけではないな」

汐見の声は穏やかだった。手袋の指先が、熱くなったクリをゆっくり転がす。右の指が皮を押さえて逃がさない。上からは素手、芯には手袋の布、両方の指に挟まれて、焼けるような熱さの上を撫でられる。

「あつ、い……っ、ぃ゛……ぅ……」

鞘は手首を掴んだ右手に力をこめた。止めるつもりで掴んだのに、掴んでいる手が主の手を股に押しつけていた。

手袋の指先が、またクリを離れて杯へ戻った。滴をすくって、卓の下へ戻ってくる。今度はまんこの筋全体に酒を塗りつけた。口の縁にも、クリの皮の裏にも酒が回る。塗られた所の全部が、少し遅れて内側から火照りはじめた。

「っ、く、ぅ……ぅ゛……ぁ、あつ……」

鞘は膝を擦り合わせた。熱は股の真ん中から逃げない。

「ぅ……ぁ、あ、つ……っ、主、もう、酒は……っ」

「杯は空いた。もう塗る酒は無い」

汐見はそう言って、杯を卓に伏せた。手袋の指が、火照った肉の上をゆっくり上下に滑り、クリの上に来るたびに素手の指と挟ん

で、軽くつまむ。酒にしみて痛いほど熱いのに、腰はつままれるほうへ寄っていった。

　倉の者が、紙から顔を上げて障子の外の日の高さを見た。

「当主、話を急かして申し訳ありません。昼には主人を迎えに行かねばならんのです。歯を抜いたあとは一人で帰すと、途中の飯屋で酒を飲みますので」

「飲ませておけ。痛みが引く」

「血が止まらなくなると、医者に言われております」

　倉の者は真顔で言って、筆をまた取った。鞘は息を殺して、筆の先を見つめた。筆が紙を擦る音と、濡れたまんこが指に擦れる音が、同じ速さで鳴っている。

倉の者が筆を置き、手を卓の上の徳利に伸ばした。

「当主、注がせていただいても」

「注げ」

汐見は伏せた杯を起こして、卓の手前に置いた。

徳利の首を、小指の無い手が持ち上げた。

その手が動いているあいだ、指は止まらない。鞘はもう、それを知っている。倉の者の手が徳利を傾ける前に、鞘は主の手首から右手を放し、自分の膝の上に置いた。

指が一瞬だけ止まった。耳の後ろで、汐見の息が浅く吸われる音がした。

それから、指が動いた。

「この徳利は主人が北の港で買ってきた物でして。口が細いのでゆっくりしか出ません。主人は、待つあいだに話をしろという徳利だと申します」

　倉の者は徳利を傾けたまま、話しはじめた。酒は細く、杯の中へ糸のように落ちていく。とく、とく、と小さな音がする。

「北の港の焼き物屋が、ずいぶん年寄りの職人でして。口の細いのしか作らんのです。注ぐ者が手を止めて喋るようにと言って」

　倉の者の手は、徳利を傾けたまま止まらない。汐見の指も止まらない。手袋の指先がクリの芯を押さえ、素手の指が皮をめくり上げたまま、酒の落ちる音と同じ間でクリを擦り続ける。とく、で押され、とく、で擦られる。

素手の指が、皮をめくったまま根元をつまんで、芯を手袋の指先へ押し出す。押し出された芯を、酒を吸った布の目が、とく、の間で撫で上げる。撫で上げられるたびに、まんこの口がひくついて、まん汁が尻の下まで垂れた。鞘は膝の上に置いた拳に爪を立てた。声を出さずに済むのは、拳のほうで息を止めているからだ。

「……ぁ、ぅ……っ、つ……」

熱い。クリも、酒を塗られたまんこの筋も口の縁も、腿の付け根まで火照っている。そこへ主の手首が袴の内側から腿に押しつけられて、腿が開かされる。開いたまんこに、座敷の冷えた空気が袴越しに入ってきて当たった。冷たさと熱さが、同じ所で交じる。

「ん゛、っ……ぁ、つ……ぃ゛……」

鞘の腰が、汐見の膝の上で浮いた。汐見は腕で押さえなかった。浮いたまま、どこにも当たらずに、腰が宙で揺れる。その動きで、クリが指に自分から擦りつけられる。

「主人はその職人に、もう少し口を広くしてくれと三年頼みました。三年断られたそうです。それで今では、自分で口の細いのばかり買い集めております」

酒はまだ落ちている。杯は満ちない。徳利を持つ手は、話をやめない。

鞘は膝に置いた右手を握りしめた。放したのは自分だ。掴んでいれば止められた。それをせずに、倉の者の手が動くこの間を自分で主の指に渡した。

股の奥で、熱が一点に集まった。

「ぉ゛……っ、ぁ゛、あつ、ぃ……っ」

腰が跳ね、宙で固まった。その真ん中から、熱い物が噴き出した。

下帯の中で、手袋の指を叩くように潮が噴いた。一度では終わらない。指が、とく、と同じ間で芯を擦るたびに、腹が縮んでまた噴く。熱い潮が下帯を一度に重くし、袴の内側へ突き抜け、腿の付け根を伝って汐見の膝の上に広がっていった。

「ぃ゛……っ、ぃ……ぁ゛……ぁ、あ……っ」

鞘は口を開けたまま、声を出さずに震えた。喉の奥から、潰れた音がこぼれる。紐で柄に結ばれた左手が、柄ごと震えた。浮いた腰が、噴くたびに前へ突き出されて主の手のひらにぶつかる。

「職人が死んだら、もう口の細いのは手に入らん。主人は今から嘆いております」

　倉の者が徳利を上げた。

「八分目で、よろしいですか」

「いい」

　杯の酒は、縁より下で静かに揺れていた。倉の者の目は、ずっとその縁にあった。

　指が止まり、すぐに抜けた。手袋の指も素手の指も、帯の中から出ていった。抜けたあとのクリが何もない所でまだ跳ね、残りが漏れて下帯の中を伝う。

　鞘は柄を握ったまま、卓の木目を見ていた。目の前がぼやけている。息を吸うと、喉が鳴りそうで、浅くしか吸えない。

まんこから腿まで、ぬるく重い。下帯も袴も、汐見の膝も、噴いた物でびっしょりと濡れている。座っている膝の上で、自分の濡れがじわじわ冷えていくのが分かった。浮いていた腰が、ようやく汐見の膝に落ちて、濡れた袴が尻に貼りついた。

汐見は杯を取り、倉の者が注いだ酒を一口飲んだ。左の手袋は、指先から手のひらまで色が変わっていた。汐見はそれを外さずに、杯を持ち続けた。

「よく注いだ。その職人の徳利なら、うちの船にも一つ欲しい」

「主人に申しておきます。喜んでまた口の細いのを買いに行きます」

倉の者は頭を下げた。その頭の先に、鞘の膝がある。袴の前は、卓の下に隠れていた。

「では本日はこれで。乾いた樽を積み終わりましたら印を取りに伺います」

「昼の船で出す。積み終わるのは主人の血が止まるころだ」

「なら、主人を飯屋へ寄らせずに済みます。ありがたい」

「印は預かる。この者に持たせて見送らせる」

汐見は鞘の手首の紐を解いた。紐が解けても、鞘の指はしばらく開かなかった。柄の形に、手が固まっている。

「立て」

鞘が立った途端、袴の前が腿にべったり貼りつき、重く垂れた。前の合わせから腿の内

側まで、掌を二つ並べたほどの広さで色が濃くなっている。座っていた汐見の膝にも、同じ形の濡れが残っていた。

汐見は桐の箱の紐を結び直して、鞘の手に押しつけた。

「前で持て」

鞘は箱を両手で受け取り、胸の下に抱えた。腕と箱が、袴の濡れた所を隠した。

倉の者が障子を開けて、土間へ降りた。汐見も立ち上がり、鞘のすぐ後ろに来た。鞘は座敷の上がり口の縁に立った。土間へ降りれば、主の手の届く所から出てしまう。誓約の首輪の革が、首の後ろで留め金ごと、まだ鞘の首にあることを思い出させた。

上がり口の縁に立ったまま、鞘は倉の者を見下ろした。袴の濡れは箱の陰にある。立っているだけで、冷えた下帯がまんこに貼りついて、嘖いたばかりのクリがじんと疼いた。鞘は膝を伸ばしたまま、動かなかった。

後ろに立った汐見の羽織の裾が、鞘の尻に触れた。濡れて貼りついた袴の上から、尾がゆっくりと腿の裏を撫で下ろす。撫で下ろされると、前で冷えていた下帯が引かれて、まんこの筋に食いこんだ。嘖いたばかりのクリが布に擦られ、膝の裏まで痺れが走る。

「ぁ……っ」

鞘は箱の角を胸に押しつけて、声を箱の木に吸わせた。尾は腿の裏で止まり、ただ重さだけで、濡れた布を肌に押しつけ続けた。

倉の者が振り返り、鞘の抱えた箱を見て腰を折った。

「護衛の方にお荷物まで持たせてしまって。申し訳ないことです」

「……いえ」

「主人の歯が治りましたら、改めてご挨拶に伺います」

土間を通って表へ出ていく背中が、通りの人に紛れた。刃の気配は、どこにもなかった。

すぐ後ろに、汐見が立っている。

「主」

鞘は振り向かずに、箱を胸の下に抱えたまま言った。

「奥の間まで私の後ろを歩いてください。前を歩かれると、主の背中ばかり見て戸を見損ないます」

　後ろで、汐見が息を吐く音がした。笑ったのかどうかは、見なかった。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名　護衛、鯱の主に誓約の首輪で繋がれ、警護中に声を殺して潮を噴き、剣を差し出す

サークル　もふもふといっしょ！

発行日　2026・10・21

レーティング　R18